
GOD:EATER < 神に魅入られた少年達 >

焔の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOD：EATER<神に魅入られた少年達>

【Nコード】

N8239U

【作者名】

焔の錬金術師ラビ

【あらすじ】

アラガミに全てを奪われた神野・・・
しかしゴッドイーターになり、昔の仲間がここに集結する
神野たちはこの戦いを終わらせることは出来るのか・・・

決意

俺は・・・打ち勝つ！

そして・・・終わらせるんだ・・・この腐った・・・世界を！！！！

俺は、そう思い、この世界に足を踏み入れた

この世界・・・GOD：EATERの世界に！！

俺がここに足を踏み入れたのは他でもない

守りたかった、俺は・・・

俺はこの手で、誰かを・・・守りたかったんだ

そう、今もまた、守れずにいる非力な自分が許せない

俺は、神野 恭は己の非力さをのろった

この世界は、アラガミと呼ばれる化け物に食い尽くされている

アラガミ・・・絶対の捕食者、世界を終末に導くもの

そう呼ばれているが、俺から見ればタダ一言

仇・・・

俺は・・・最初はタダの高校生だった

なのにつ！！俺は・・・あのアラガミに全てを奪われた・・・

いや、仲間はある、だけどっ！！

守れないものもあつた！！それを俺は許せない！！！！

あのアラガミ・・・金色のスサノオを・・・この手で・・・ぶっ殺す！！！！

そのために俺はG O D : E A T E Rになつたんだ！

俺はそうおもいながら、アラガミを唯一倒せる生態武器

『神機』の適合試験にA+で適合したのだ

俺はこのとき・・・神を敬つたね

だから俺はこの神機・・・『イーブルワン』『リジエクター』『レ

イジングロア』

この三点がついた神機で・・・

俺は荒れ狂う神を殺す・・・

決意（後書き）

さあーとと？

俺の大好きなゲームの二次創作！！

よければ呼んでください！！

昔の仲間

俺は孤独だった・・・

中学のころはいじめられて、かばう奴もいたけど、そいつがどんな心情か知らなかった

だから、俺は出来るだけ人を信じないようにした

アラガミが出現し始めたのは、5年前だ

そう、丁度俺が小学生のときに・・・俺は恐怖を感じた
本当の恐怖、人が、肉が、骨が、全て砕くあの音

そして、中学はそんなこともあり、いじめの度合いがすごかった
アラガミ出現地帯に何回も放られ、何回も死に掛けた
でも、井豪は・・・井豪リョウヤだけは、俺といてくれた
だけどっ・・・高校からは別々になり・・・あの事件が起きた

<接触禁忌アラガミ出現>

この速報はすぐに世界に報道された

日本も例外ではなく、まず最初に被害にあった国だからだ

そして、そのつ最初の事件が、俺の高校で起こったのだ

俺は、いつもの仲間、つつーか悪友、

杉崎 ヒロキと遊んでいた

教室で暴れるのが俺達の日課・・・なのにつ!!!

轟音とともに現れた刀で・・・クラスメイトはずたずたにされた
俺とヒロキは、ただ恐怖におびえ、隠れていた

その時見たんだ・・・金色の・・・スサノオを・・・

その時、俺の目に4人の女の子が目に入った

須藤 唯 桜庭 桜 西条 あずね 相場 恵の四人だ

彼女たちは俺達の友達、目の前にはその友達を殺そうとする化け物

俺は駆け出していた、振り下ろされる剣を・・・受け止めようとして・・・

結果は悲惨なものだった

4人は無事だ、だが、それ以外の人間は・・・全員死亡

俺達はその状況に目を見張る

全員死亡、残ったのは6人、俺、ロキ（ヒロキ）、唯、桜、あずね、恵

俺達は泣いた、死んだ肉片を集めて埋めた

丁度そのころ、ゴッドイーターの適正結果が送られてきたのだ

結果はあずねと恵は整備士に合格

残りはA+だった

そして、俺は新型イーブルワン、リジエクター、レイジンググロアを

ロキは、新型ブラットサージ、イヴェイダー、レイジンググロアを

桜は旧型レイジンググロアを

唯は旧型クレメンサーを

俺達は武器を手に入れ、今この場にいる

だからっ！俺はこの手で全てを喰らう・・・そう誓った

数日後、俺の目の前に驚く人物が現れた

井豪 リヨウヤ、中学のころの友達でおれ自身は親友と思っている
彼はどうだろう？まあ知ったこっちゃない

そう、彼も適性していたのだ、ゴッドイーター新型
アルストロメリア、クロユリ、グロリオサに・・・

「井豪・・・お前もか・・・」

「お前こそ、ゴッドイーターになっただんだ」

そういつて俺達は今まで逢った系列を話した

「そうか・・・お前はそんなことが・・・」

「え？井豪は違うの？」

「ああ、俺は適正したからなっただけ」

「そうか・・・ならさ・・・」

俺はリヨウヤに手を差し出して

「パーティ組もうよ、俺達で」

そういつて笑う

井豪は、笑いながら「めんどくさっ！まあ・・・いいよ」
そういつて俺達は再会とともにチーム結成された

これが・・・後に最大のアラガミを倒す部隊となる・・・
第一部隊の始まりだった

『謎』の特異点

「え！？同じチームになれない！？どういうことだよ！？」

俺は支部長、上口かみぐち了輔りょうすけに問い詰めた

「だから・・・まだその・・・」

支部長はゴニョゴニョと悩みながら俺達に伝えた

「実は、君たちは普通のゴッドイーターじゃないんだよ」

「はあ？」「俺達が？」

「そう、いや、井豪くんは普通のゴッドイーターだ。デモね杉崎君と神野君

君たち二人はチョット異常なんだよ」

？？？言っている意味がわからない

だが、心当たりならある

普通はゴッドイーターは神機に捕食されないように制御装置、腕輪をつけている

リョウヤにもついている、だけど・・・

俺とロキにはそれがなかった

「だから、ちよつと勝手にチームは組めないな、それと後で神野くんは杉崎君と来てくれないか？」

そついわれて俺達は支部長室を出た

それに、俺はなんとなくなんでその「謎」のゴッドイーターと「普通」のゴッドイーターを組ませないのかはわかる

恐らく政府が決めてるんだろう

そう、俺達ゴッドイーターは一般人から見れば救世主
だけど、政府や国家から見たらただの道具、おもちゃに過ぎない
最悪兵器呼ばわりだ

世界を食い尽くす『アラガミ』

それを暗い世界を救うもの達『ゴッドイーター』

だが、そのフェンリルを支えているのは国家だ

だから勝手な行動は許さない、ましてや、謎を持ったゴッドイーターを

野放しにするはずがない。

必ず鎖をつけて私利私欲に使う

なにせこの時代、アラガミがいるのにも拘らず

戦争なんておっぱじめるバカもいる

それにこの世界は普通の世界じゃない、あくまでも俺達がいるのは
日本だ

だけど、他のところは違う

アメリカやらドイツやら、そんなものは存在しない

日本、これは俺が勝手にそう呼んでるだけで実際は『N-980』だ
この世界はそうやって構成されている。

……だから俺達は組めないのか……

そう思いながらロキを呼び

支部長の部屋に行く

「入っていいよ」

そういわれて俺達は入る

「さてと・・・まず最初に、言っておくことがある」
そういわれて俺達はソファに座ると

「君達はあまり人にゴツドイーターというのは明かさないうで欲しい」
「なんで？」と、ロキが聞く

「君達はまだ異例だ、腕輪をつかわずにアラガミの細胞を体内に取り込んだんだ

いつ何時、君達がアラガミになるかわからない

逆にいうなれば理性を保ち、その力を使うことが出来るかもしれない

だから普通の学校生活を送ってくれ、任務はメールして知らせるから」

そのあと、俺達は普通に黒松学院の寮に戻った

俺達は黒松学院の1年D組だ、みんなは以前の惨劇のせいで

その事件にはあまり首を入れない、それを覗けば普通のクラスだ
町もそう、アラガミがいるのに結構活性化している

俺の町なんて都会だ、ただ、アラガミが出現するのは当たり前なので
その度にどこか壊れる

もともと、町を一つ一つアラガミ壁で守っているので中身が攻撃されることは

偏食因子のアラガミがでたときだけだ

それ以外はそとの探索隊が見つけて報告

第一部隊らが殲滅しに行く、といったないようだ

それもあの接触禁忌アラガミ出現事件以来の話だ

唯達は普通のゴツドイーター、だからみんなも唯や桜を頼っている

だが、その反面、唯や桜にはちょっとした過去や事情があるらしく中々俺達二人以外は心を開こうとしない

それを快く思っていない奴らもいる

唯や桜やあずねや恵は、ぶっちゃけた話超可愛い

唯はおっとりの性格であり

髪の毛はショートヘア、といつても肩くらいはある

頭の右側側面に結んでぴょんと跳ねた髪が唯自慢のチャームポイント

恵はオドオドしている髪はロングヘアのストレート

俺達以外の男はほとんどびくびくしていて中々話そうとしない

あずねは元気活発のツインテール、ツインテールの両方が結んでるのに

背中くらいまでである、俺達以外の男は断固拒否らしい

桜はやさしく、だけど男性恐怖症、髪は黒のストレート

背中くらいまで伸びている

この四人が俺達のクラスメイトであり戦友であり親友だ。

だけど、この四人に共通しているのは、

俺達以外の男は苦手、ということだ、なぜかは知らないけど

この四人は暗い過去などがある、いちどそつという相談も乗ったこともある

そして、決まってこの手の美少女は立ちの悪いバカどもに絡まれやすい

いまだそついったことはないが、いつそつなるかはわからない

そついいながらも唯と桜はなぜか男子寮の俺達のルームメイトなのだ

『ここにすむの！！きょーくんいるし！！』 『ヒロキくんもいますし、いいでしょ？』

と、美少女二人の上目遣いに負けた

非力な男こと俺とロキは、結局OKし、今では当たり前になっていた

ちなみにあずねと恵は女子寮にいます、当然だが

そうだった状況で、俺達はいつたい、何を思う？

俺とロキ・・・二人の特異点・・・

アラガミの力・・・

『謎』の特異点(後書き)

ひっさびさの更新だああアア!!!

みんな!?大丈夫かい!?

こっちはあまりキャラは募集してない!!

ごめんよ!!!

感じた違和感

「あれ？唯どこいくの？」

俺は急いででようとした唯を呼び止めた

「任務、緊急なんだって」

「どんな任務だ？」

「オウガテイルの大量発生、偏食因子じゃないんだけどね」

「あれ？唯一人？」

「うん！他のゴッドイーターは出払ってるらしいし」

俺はこのときちよつとした違和感を感じていた

なぜ入隊して間もない奴をそんな高度なミッションに行かせる？

「なら俺も行くよ」

そついつて唯の後に続く

「だつダメだよ！！きょーくんは特別なんでしょ！？」

「いいっていいって、ばれなきや問題ない」

そついいながら続く

なんせ唯の神機は近距離型だ、後ろを取られても対応できそうだけど

彼女は女の子だ

俺はそれを有線にしてただ一緒に任務に向かった

それは地獄だった
目の前に広がるのは・・・無数のオウガテイル

こいつ等を一気に相手は辛いかもな

そう思いながら俺は神機『イーブルワン』を構えて

「唯・・・行くぞ!!!」

「うん!!!」

そういつて飛び込んだ、アラガミの群れへ

「おおおおおらああああああ!!!!!!」

俺は力いっぱい振りかぶり、一気に振り下ろす!!!

<グシャ!!!>

何かが潰れる音がして一匹のオウガテイルが沈む

「もういつちよおおおお!!!!!!」

そのまま横殴りの感じで

神機を横に一閃した、また、今度は数体のアラガミがイーブルワンのノコギリ上の刃に
ずたずたにされた

俺の神機、イーブルワンはバスターブレイド、見た目は馬鹿でかい
ノコギリだ

真っ黒なノコギリ、それを俺は軽々振り回す

まるで、悪魔のように・・・

唯の神機は旧型のクレメンサー、ロングブレイドだ、見た目はブレ
ード、普通の剣より

幅を広げた感じの真っ青な神機だ、まるで、悲しみを背負っている

俺達は、この力で残りのアラガミを一掃した

その後はまた寮に戻った、だけど・・・

胸の違和感は・・・消えなかった・・・

感じた違和感（後書き）

ちよつと更新速度が遅いけど勘弁ね!!!

「んんが！何しやがる！！」

「おんまえなんで起こさなかった？」

すると、目が泳いで

「え？なんのことかな？」

「コンのバカ！！とぼけてんじゃあねえぞ？」

「わーったよわるかった！」

そういつてことこの事情を説明してもらった

どうやら淋しくて俺の布団に入ったのは事実らしい

その後こいつは・・・写メっていたのでそのケータイのメモリを全
消去！

そんなことをしていると

<ずうううううううううううううううううう>

激しい揺れの後に

<ぐガアアアアアアアアアア！！！！>

叫び声が聞こえた

俺達は窓の外を急いでみた

そこにいたのは・・・アラガミ、サソリの形をした騎士、ボルグ・
カムランだ

「ボルグカムラン！！」

「こんなときに！！」

俺達は急いで『俺達』の仕事をした

俺達の緊急要請、偏食因子のアラガミの撃退とコア回収
もちろん、極秘で

「唯！桜！」

俺は小声でよび、俺とロキは仮面をかぶり、神機を呼び出し屋上に

唯と桜は正面玄関から撃退に

「はああああああ!!!」

唯の柔らかな叫びと細いからだが大らかな神機、クレメンサーを振るう

「あたれええええええ!!!」

そう叫びながら桜はレイジンググロアで敵を狙い打つ

が、女の子二人の力じゃ及ばず

すぐに吹っ飛ばされる

「きゃあああああああああー!!!」

そして、吹っ飛ばされて唯の方向に向かった

その瞬間、俺は頭にある言葉がよぎった

『死』・・・

「つてい!!!」

俺は迷わず屋上から飛び降り、マントを翻しながら

「俺の唯にテエだすなああああああああああ!!!」

素晴らしいながらチャージクラッシュ状態のイーブルワンをたたきつける

<ぐアアアアアアアアアアアアアアアア!!!>

悲鳴のようなものを上げながら体液を撒き散らす

俺はその脚を横殴りに切り裂いた

「くたばれええええええ!!!」

俺は神機を銃形態にして、俺の銃神機、レイジンググロアで撃ちまくる

「穴だらけにしてやるよ!!!」

素晴らしいながら撃ちまくる、つとここまでくれば・・・

「やれ!!!もう一人のダブル!!!」

「だあアレがダブルだああアアア！！！！」

素晴らしいながらも一人のダブルことロキがチェーンソウをベースにした神機

ブラッドサージで回転しながら落ちる

「くううううたああああばああああーれええええ！！！！」

叫びながら回転切り！！！！

<ズシャアアアアアアアアアア>

と、悲鳴も上げられなくなったボルグカムランの体液が吹き出た

「終わったな・・・」

「あつけねえなあ・・・」

素晴らしいながら俺達はコアを回収、何気ない顔で教室に戻り

唯たちは質問を全部無視して、フェンリルに向かった

俺たちがとったコアをもつてね・・・

これが俺達の仕事、影の存在、切り札、そして、まだ見ぬ脅威・・・

4人

「んがー！ヒマだ！！普通の任務いこうぜー」

そっぴいながら俺はフェンリル直属の個人部屋に集まった

3人に呼びかけた、ロキ、唯、桜だ

「いいけど今仕事あつたっけー？」

そっぴいながらこそをあげるロキ

「あつたんじゃないかな？」

そっぴいつてロキの腕を使つて立ち上がる桜

「じゃーいこー！！」

そっぴいつて、俺の上へのしかかつて一向に立ち上がるうとしない唯

「ん？なら、起き上がってくれると嬉しいなあ」

「じゃーおきてよー」

俺がおきるのかよ！！

そっぴいながら立ち上がった

「おお！！カモチイ！！」

そっぴいながらおんぶ体制になつた状態で

エントランスに向かう、エントランスの受注所には

オペレーターの竹田 ヒバリがニコツとして

「あらあら？ラブラブ状態でお仕事ですか？」

といつてきた

「変なこといわないでよヒバリちゃん・・・」

そっぴいながら仕事はないか？とたずねる

「丁度今入りました、旧市街にシユウです」

シユウ・・・か

「了解、ありがと」

「イってらっしやいデス〜」

そういつて俺達4人は任務に向かった

「っあ、アレじゃね？」

「だな・・・」そういいながら武器を構える俺達
ブラッドサージのロキ

イーブルワンの俺

旧型レイジンググロアの桜

旧型クレメンサーの唯

ふっふっふ・・・最強には程遠いな

そう思いながら、じつとシユウの様子を見守る

奴の隙が出来れば一気にしとめられる

シユウはベースはひと、でも身長は4.5メートルだ

要は人型の巨人

背中に生えた大きな翼は先つちよが大きな手になっていて

そつちでメインに攻撃する

俺達の通り名は「アラガミ1の格闘家」だ

大きな手のひらには穴があり

そこから破壊的なエネルギー弾をだして主に戦う

そんなことを思いながら、ふと目に付いたのは

「おいつ、アレって！」

小さな女の子だった、ボロボロの服を見るからたぶんここらに住み
着いている

一般人・・・やべえ！！

「おい、予定が狂った、行くぞ！！」

「っっおう！！」

そういつて俺は一気に駆け出した

シユウはもう女の子に気がついていて

ゆっくりと近寄っている

「ウおおおおおおおおおおお！！！！！！」

俺は叫びながら、シユウめがけてジャンプした

ゴッドイーターの脚力はハンパなかった

一気にシユウの頭上に到達、俺は神機を振り上げ

「おらぁ!!!」

一気に振り下ろす!

<ズバシユ!>

少し軌道がずれて背中を裂いた程度だった

だが、意識をこっちに集中させるにはばっちりだった

「よっしい、こっちにむいたな? 唯! 桜! その子を安全な場所に!

!」

「わかったわ!」

「まかせてえ」

そういいながら瞬時に行動する二人

「ロキ! 撃ちまくるぞ! 接近戦は危ない!」

「わかってるって!!!」

そういいながら俺達は神機を銃形態、レイジングロアに変換させて

距離をとる、そして、迷わず引き金を引く

<ズダダダダダダダダダ!!!>

弾丸は全てとは言わないがほとんどあたり、シユウはふらふらしていた

「うっし、行くぜえ!!!」

そういつて俺はシユウの懐にはいつて

一気に神機を横に一閃する

<バギイ!>と、シユウの足の装甲が砕ける

「ロキ!」

「OK!!!」

そういつてロキは神機を構え、神機の中に存在するアラガミを呼び

出した

「食いちぎってやらあ!!!」

そういつて、アラガミはシユウを喰らう

<があああああああ!!!>

シユウが苦痛にもだえたとき

俺は、チャージしたイーブルワンを振りかざし

「いっけえええええ!!!」

振り下ろした、シユウは翼でガードを測ったが

俺の神機にあっさり砕かれ真っ二つになった

「はあ・・・はあ・・・んっはあ・・・」

このチャージクラッシュにはちよつと体力が必要でね
終わったら息切れがハンパじゃないんだわ・・・

そう思いながらコアを回収、無事に家族に届けてきた
二人と合流、フェンリルに戻った

この四人なら、俺はどこまでも戦える気がした

4人(後書き)

あああああああああ!!!

早くゴツドイーターの三作目を!!!

つくつてうれえええええ!!!

アラガミ奇襲

「ねーみい」

俺はアクビをしながらそうぼやいた

「だなあ、なんかヒマだなあ」

と、ロキ。

俺達はごねにごねまくってようやく唯たちとチームを組むことが出来た

支部長を泣かせたのは申し訳ないが・・・まあ良いか

で、そんなことがあり早1週間

俺達に回ってくる特別任務なんかありやしなかった

最近はアラガミもおとなしくなっている様子で・・・

だからこうして暇をもてあますことも出来る

あずねと恵は神機の調整はバッチリといていたのでいつでも出撃できるのだが

「いいかげんなんか進展ねえのかな？」

俺は何度目かもわからないあくびをしながら

対アラガミ装甲壁を見つめた、そんな時

明らかにでかいヒビが壁に入った

3キロ先にあるこの学校からでも直視できたほどだ

ガタッ！！

俺は立ち上がり唯たちに声をかけ、先生に具合が悪くなったと言って早退

唯たちはアラガミが出現したのでといって学校を出る

「なんだよ！あのヒビは！！！」

俺は走りながらロキに問う

「知るか!！」

ロキも焦りながら答える

唯と桜は後ろからついてくる

ヒビは目の前でも尚、拡大を広げている

「クソツッ! 装甲壁破るとか・・・ドンだけでかい奴だよ!！」

「数かも知らないよ?」

ロキが怖いことを言うのでそれはスルーして次の話題へ

「でも・・・こんなので・・・」

「ああ・・・やりすぎだぜ」

ようやくついた、だが、その場所は悲惨な光景だった

目の前には一番上の壁が崩れてその瓦礫に家を壊された家族や
必死に抵抗しているゴッドイーター防衛部隊

逃げ惑う市民・・・

「これが・・・現実かよ・・・」

俺は唖然としながら呟いた、だが、ロキにはたかれハツとする

「上に行こう、こういう状況下確かめないと」

「う・・・ああ」

ロキに言われ、俺達は急いで壁の中を通った

唯たちには住民非難を頼んだ、この状況では・・・そう思ったからだ
そして、壁の窓でみたものは・・・

『コンゴウ』基本的なベースは猿、そこから腕をでかくして装甲を
つけ

口は裂けるように大きくなり

その全体を背中のパイプを伝い風を纏っている

そのコンゴウが・・・35体・・・壁の向こうを叩いている

「おいおい・・・マジで？」

「やばすぎるだろ」

あんなもんが中に入ってきたら守りきれないのは確実、いや、俺達だつて死ぬかもしれない

「アレが・・・アラガミ」

俺は思わずそうぼやいていた

そうだ、オウガテイルのとき味わった感覚と同じ・・・

今までは一体を4人で戦っていたから勝てた

だが、今回の先頭は一人何十体も相手にしなければならぬ・・・

「でも・・・行くしかねえ・・・」

こんな奇襲に屈するようじゃいけないんだ

俺が・・・やつ等をこの世界から駆逐すると誓ったんだ！！

「ロキ、どうする？」

「どうするって・・・なんだよ？」

ロキは明らかにこの状況に動揺している・・・とうぜんか

「行くか？」

俺は核心に触れてみた、すると、ロキはみるみる青ざめていく

「いかねえのか？ならいい・・・俺は・・・行く」

そういつて俺は上の階に走る

そして、丁度ひび割れて人が抜け出せそうなところを見つけ

壁を抜ける・・・その下はコンゴウの海・・・おえ、キモイ。

だけどさあ・・・やるしかないならさ

確かに過去の払拭もあるかも知れない

だけど、今はソレと隣りあわせて・・・守りたいモンがあんだよだからさあ・・・

そして、ここまでナマの体にアラガミを取り込んだんだ

何かしらの負荷がくるのだろう、そう、頭の中の片隅に
おいていた
そして、その時は、思いのほか早かった

<バキイ！！！！>

「ヴァア？」

左腕が・・・化け物になっていた

それは、禍々しくも気高い、まるで・・・アラガミのように

「あ・・・あああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！」

左腕が痛い・・・左腕が・・・アラガミに

「うわあああああああああああああああああああああああ
あああああああああ！！！！」
俺は叫んだ

そのとき、コンゴウが襲ってきた

俺は武器を持つ気力すらなかった

腕が、アラガミに・・・俺は・・・化け物になったのか！！

「あああああああ！！！！」

「あゝあゝ、つたく、うるさいなあ」

声が出た、俺の真上から

「しょうがないなあ・・・助太刀してやるよ」

目の前に四人の男女がいた

「俺達、ゴッドイーター第一部隊、<セカンドチーム>がな！」

アラガミ奇襲（後書き）

さてと・・・ゴツドイーター2製作決定!!
いよっしやあああああああ!!!

久々にやるのかなあ？ゴツドイーター!!

セカンドチーム

「セカンド・・・チーム？」

俺は腕の異常事態を回避すべく

体内のアラガミを使おうと試みた

だが、腕のアラガミ化？は変わらず、ただただ存在していた
痛みは消えていた、だが、この違和感は・・・

それと同時に、俺は左目にも異常を感じていた

神機を鏡代わりしてみると、左目が金色になっている

「んだよ・・・こいつは・・・」

これがアラガミ化なのか・・・でも・・・

「だとしても・・・逃げるわけにはいかネェンだよ！！」

俺は右手に神機、左手はそのまま駆け出した

この手は武器にもなってくれらるだろうしな

「セカンドチームだかなんだか知らネェが！俺の獲物に手をだして
んじゃねえ！！！！」

俺は一気に群れに飛び込み剣を振るう

隙を見て飛びつくアラガミには

左手で顔を引きちぎる、そして、そういう危機状況を

左目が教えてくれる、この左目の能力か？

「たとえアラガミになろうともなあ！！お前等を全て駆逐するって
誓ってたんだよお！！」

俺は両手で剣を持ち、一気にトドメのチャージを行う

「んな!？」

「マジか!?!」

セカンドチームはそのチャージの刃のでかさにいったん後退する

俺の神機の刃は直径でもかなりあり、一気にアラガミをたたきることが出来た

「くたばれえ!?!?!」

俺は容赦せず、ためらいも躊躇もせず、剣を振るった

「がああああああああああああああ!?!?!」

俺は戦いが終わり、セカンドチームと名乗るものがいなくなった後ひたすら痛みに絶えていた

腕が戻らない、俺の中のアラガミがそれを拒んでるのか

それとも力及ばずなのか、どちらにせよヤバイ

「戻れよ!戻ってくれ!俺はまだ・・・こんなところで終わりたくないんだ!?!」

俺の叫び虚しく腕は戻らない

戻そうと力をこめればそれに反して痛みが襲う

「モドラネエなら・・・切り落とす」

俺は最後の覚悟で腕にそう言った、この腕に意思があるのかは謎だが、あるのなら切り落とされることを拒むはず。

そして、その考えは的を射抜いた

腕は収まったかのように元に戻った、左目も元の瞳に戻った

「はぁ・・・ようやく戻ったか・・・クソが」
俺はそう愚痴りながら、アナグラにいつてみた

「セカンドチームの鮫哀 卓です、ヨロシク」

「同じく一杉 涼太」

「それに続いて、輪廻 瑠璃」

「同じく杉浦 千晴」

目の前には俺を助けたセカンドチームがいた
俺は軽く頭を下げるとちよほど瑠璃と名乗る女の子と目が合った
すぐにそらされてしまったけど

「初めまして、第一部隊の神野 キョウです」

それだけ言つて自室に戻った

そこにはロキがいた、ロキは俺を見るなり近寄つて腕を見た

「みたのか？俺の・・・」

それだけでも何を言ってるのかは察するだろう

ロキはコクリとうなずいた

「この腕は・・・俺達特異体質の人間に現れるのか・・・
それとも俺が無茶をしたからこうなったのか、まだよくわからな
いんだよね」

「たぶん前者だと思うよ、特異体質ってことは何かしらの変化が現
れる

それがお前にいたつてはアラガミを一気に捕食しすぎてなったわ

けだし」

「だな・・・でもこれ俺の意志で動くんだよ」

そういつてから俺は左目を発動させてから左腕に意識を集中するすると、左腕はメキメキと嫌な音を立てて変貌した

「ほらな、でもこれ触らないほうがいいかも」

「だな・・・っあ、それからセカンドチームのことなんだけど」

「あ？」

いきなり話をかえられ戸惑う、だが、とりあえず平静を装い聞いてみる

「あまりいい噂聞かないんだよね、特に鮫哀と一杉っての」

「ああ、あの目つき悪い二人か」

あの二人は結構悪役面だったしな・・・

「だから気をつけた方がいいぜ？」

「善処しておくよ」

そういつて俺は眠りについた、俺の腕・・・アラガミ・・・か・・・

正義の悪

「まったく・・・思いどおりになるんだが、感覚はなれないな」
俺は訓練場にてアラガミ化の使い方を練習していた
どうやら俺の意思に反映してくれているのは確かだ、そして、
この腕にも何かしらの意識はあるのも確かだ。
だが、どうやら友好的なのだろうか、俺の左目は時々
頭の中に声をかけてくる

<君とは仲良く出来そうだね>と、

「しっかしまあ、だからこそ扱えるんだろうなあ」
俺はもう一度アラガミ化してから呟く

どうやら左目の能力は危機察知能力と反射能力に長けている
左腕のほうはアラガミを捕食して力を得るらしい
前回の戦いで力がバカに大きかったのは一気に5体のアラガミを
捕食したからだろう。

大きな力を得るには、それなりに負荷がかかるってことか。

「さーてと、もうチョット練習するか」

俺は右手に神機を、左手にアラガミを、そんな形を取っていた

次の日、俺達二人に任務が渡った、その内容は

「旧市街の護衛？」

「うん、ここから6キロはなれたところに旧市街があつてね、そこにも人が

いるんだよ、もちろんアラガミ装甲の向こう側で」

支部長は申し訳なさそうに言葉を繋げる

「それでね、あるアラガミが接近していることが偵察班の情報でわかつたんだ

そのアラガミの名はグアドリガ、たぶん見たことないと思うけどベースは戦車、前足はキャタピラをイメージしていて人馬みたいな形をしている

後ろには装甲をつけた後ろ足、おまけに人型の骸骨には

腕はなく、代わりに円盤のカッターのようなものがついていてねそれで相手を串刺しにすることも出来る、胴体には背中にミサイルポット

前装甲、要は前側の胴体には核ミサイルの4分の1の威力のミサイルが

搭載されている、だからその場所は弱点でもある、だけど常に装甲があるから

カウンターを狙ったほうがいい」

支部長はそこまで言って思い出したように

「っあ、そうそう、セカンドチームも同行することになったから、仲良くしてね」

.....

「セカンドチームは先に市街地に行ってるって・・・俺等になんの

声掛けも無しかよ」

そういいながら愚痴っていた、ロキは苦笑いして

「まあまあ、いいんじゃないか？千晴と瑠璃って女の子

以外の二人はいい噂聞かないし」

「だけどなあ・・・」

そこまで言いかけて辞めた、仮にも助けてもらったんだ、あいつ等を悪く言うのはやめよう

「ついたよ、市街地だ」

ロキのこえで俺はへりの下を覗いてみる、それは、俺等のいる町の数倍荒れずさんでいた、仮にも都会だった俺達の町よりもここはなんどもアラガミに襲われているような感じだ。

「はじめまして、この町の護衛に来ました、神野です」

「同じく杉崎です」

俺等はそういってこの町の責任者と話をあわせたと、そんな時

「助けてください!!」

いきなり女の人が会談所に飛び込んできた

責任者がわけを聞くと

「私の娘が！娘が・・・わあああああ!!」

と、泣き出してしまった、だが、それだけ聞けばわかる

恐らくアラガミのいるであろう方向に間違えて行ってしまったかあるいは殺されたか・・・

「まだ娘さんは生きてるって思いますか？」

俺はそういつて女の人の肩に手を置く

女の人は涙を流しながら

「そう信じたい、お願いします!どうか・・・どうかあの子を!..!」
そう泣き付かれた、俺はここまできたら断れるわけもなく

「しゃーなし、行こうぜ」

そういい、ロキに眼を向ける

ロキも覚悟をしていたのだろう、無言で頷く

それから方角を聞き、その方角へ足を向けた

「話しに寄ればこの辺だね」

そういいながら左目を発動させる、この眼は俺に反応してくれるので使いたいときに使える、ついでに危機察知能力に長けているから周りがよく見える。

「あつちだ・・・あつちの建物の影、女の子がいる」

俺は左目を解除して走り出す

ロキもそれにつられて走る

そこで俺達は、とんでもないものを目にした

「おら、どこにアラガミがいたか言えよ」

「さっさと教えないとこのままおいて行っちゃうぞ?」

それは、セカンドチームの一杉 涼太と鮫哀 卓だった

「ねえ、辞めようよ、可哀想だよ・・・」

千晴は必死になって止めようとしている

瑠璃は眼を伏せて下唇をかんでいる

「いいんだよ、あの二人が来る前にさ」

「なんだったらこのガキには死んでもらうしかないし」

その言葉に瑠璃は眼を剥く

「そんな！そんなことゴツドイーターとしてやっていいわけ！？」
だが、そんな剣幕を笑いながら
「だからさ！ゴツドイーターだからできるんだよ！守れなかったって
ないて謝っちまえばなあ！！」
そういつて一杉は笑った

俺は、その光景をみて頭の中が真っ赤になった
正義をかさに・・・こいつら・・・
だが、俺の怒りは一瞬で青ざめたものとなる
グアドリガが現れたのだ、それも上から、やつ等の目の前に
「っ！！」
俺は神機を発動して戦闘体勢に入る
なんと、鮫哀達はグアドリガをみるなり女の子を置いてけぼりにして
さっさと後退したのだ

グアドリガの眼が女の子に向かう
そして、ミサイルポットを開く

そしてこの瞬間、俺は体が勝手に動いていた
殺させない、殺させてたまるか！！

「うおおおおおおおお！！！！」
俺は左手をアラガミにし、女の子の前に飛び込む

「神野！！！！」
口キも神機を出して向かってくる

そして、肝心の女の子をかばったのは、なんと瑠璃だった
「伏せて！！！！」
そういつて女の子を抱きかかえ体を丸める

それと同時にミサイルが発射された

間に合ってくれ!!

「うわあああああああ!!」

俺は神機をかなぐり捨て

ミサイルと瑠璃たちの間に入って

「やめろおおおおお!!!!」

俺は左手のアラガミ化した腕を大きな盾に変貌させた

<ガガガガガガ!!>

盾のムコウでミサイルが爆発している

痛みはなく、ただ異様な感覚が体に走った

<君も無茶するネエ、ちよつと体を貸してよ、大丈夫、僕と左腕は

一緒

なんだし、僕のほうが上手く扱えるよ>

そして、俺の意識がとんだ、だが

俺の体が何かに動かされているのがわかる

「そんじゃ、選手交代だね」

そんな声が響いた、俺の声だ、だけど、それはどこか・・・

無邪気で残酷な、冷めた声だった・・・

正義の悪（後書き）

あー久々にゴツトイターしましたよー
感覚が鈍りまくってもう大変だったWWW

金色の眼

「それじゃ、選手交代だね」

俺の声であって俺の意思が入っていないソレは
グアドリガをみるなり微笑し

「この程度、神機を使うまでもないよ・・・」

そういつて左手をグアドリガに突き出し

「それじゃ、ゲームスタートだ」

そういつて駆け出した、いや、飛び込んだといったほうが正しいか
もしれない

俺は、俺の体は一気に距離を詰め、その左手を

前面装甲にぶち込んだ、前面装甲はピクリともせず

グアドリガの標的が女の子から俺へと変わる

「っち、厄介だネエ」

そう舌打ちした俺の体を使っているものは

そのまま前面装甲を上りミサイルポットのある

胴体に到着、一気に片方のミサイルポットを引きちぎる

<ガアアアアアアアアアアア!!!!>

グアドリガが苦痛の悲鳴を上げる

それを聞いて、俺の体は

「あはははは！いいねえ！それだよそれえ！！もっと聞かせてよ！
！」

問答無用で傷口に左腕を突っ込んでかき回す

<アアアアアアアア!!>

必死に振り落とそうとしているがきつちり深く

入り込んでいる俺の腕は中々抜けない

それどころかより深くに入り込む

「ハハハハハハ！バアーカ！自滅すんじゃネエよつと」

俺の体は引き抜くなりグアドリガの顔をその左腕で引き裂いた

<アアアアアアアア！！>

もはや何も出来なかった

そこにいるアラガミはさつきまでの禍々しさを感じさせてなどいない

ただただ、哀れだった、その姿は異形そのものであり人類の敵だ

俺が全て駆逐すると決めていた・・・

だが、そんな思いもあっさり壊すほど、そいつは強暴だった

ただ無慈悲に、ただ冷酷に、ただ残酷に

俺の左腕はアラガミを砕いた、ちぎった、裂いた

俺の左目が金色に光る、俺は抗おうとはしなかった

だって・・・コイツラヲ殲滅できるなら

ミンナヲコロシタコイツラヲ・・・

「あはははははは！それじゃあフィナーレと行きましようか」

俺の体はアラガミをジャンプ台にし高く飛んだ

そして、真つ先に前面装甲に向けて落下

その装甲を砕いた。

そして、あらわになった弱点・・・それに向かって

「それじゃあ・・・死んじゃえ！」

一気に刺し貫いた、血が降りかかる、アラガミの血液

人間の色に近いそれはただただ俺に降り注ぐ

俺は拒もうとせず

それを笑いながら歓喜に震えるのだった・・・

俺は落ち着き、左目に呼びかけた

もういいだろう？変われ・・・

「ええ？やだなあ、せつかく表に出たのにさ」
なっ！なんだとっ……

「この女の子達……」
やめろ！それ以上言うな！！

「殺しちやっつていいよね？」

やめろ！やめろおおおおおおお！！！！

瑠璃たち歩み寄る俺の体

俺の狂気が今、目の前の二人を殺そうとしている

やめろ！やめてくれえ！！

俺は叫ぶしか出来なかった

「えへえ〜、いいじゃんか、人間なんてさ、どっちにしろ僕が助け
なきゃ死んでいたんだよ？」

なら助けられた命を僕に捧げるのは当然じゃないかな？」

そんな当然はない！頼むからやめろ！！

「君は僕の宿主だからさ、聞いてあげたいんだけど……なら条件
頂戴」

条件だと……？

「うん アラガミを殲滅したいってその気持ち……半分僕にも分
けてよ」

どういう意味だ……

「簡単に言うとき、アラガミを殺す快樂、僕にも時々味わわせて」

俺の思考はショートしかけた

俺の目的を知っている

俺の脳から読み取ったか・・・だが、俺の獲物を・・・

なら、俺も条件がある

「なんだい？」

「二つだ、いいか？」

「僕が拒まないなら」

俺がその条件を飲む代わりにその二人の命を助ける

「別にいいよ」

ソシテ最後に、金色のスサノオ、こいつだけは俺にやらせる

「・・・つは、あいつかあ、別にいいよ」

なら交渉成立だ

「そうだね、交渉成立だね、そんじゃ返すよ君に」

ふっ・・・と体が一瞬軽くなり

下の間隔が広がる、左目は金色じゃなくなっていた

<しょうがないから奴はお前に上げるよ、だけど僕との約束、違えないでよ>

俺の中でそういった俺のもう一つの人格

「いいぜ、背負い込んでやる、お前も、殲滅するの・・・」

俺は覚悟というか、なんとというか・・・

ただ、明確にわかることはある

これで、俺はあいつを倒せる力が宿ったということだ

黒猫

「さてとお、で？結局条件は飲んでくれたんだろ」
俺はぼそりと呟く

<ああ、金色のスサノオは君にあげるよ>

「よし、なら、俺も約束は守る」

俺はそういつて自分の任務に向かう

今回の任務はシユウ墮天の討伐

荷電性のシユウといったところだ

俺は任務の場所につき、任務をひとりでに開始する

<でもさびしいねえ、一人で任務なんて>

「しょうがないだろ、俺に与えられたコードネームがあれだし」

俺に与えられたコードネームは『黒猫』

猫のように誰にもつかずにただ己の欲を満たすだけに動く

「まあどうでもいいか」

そついいながら歩いてると

「いやあああああああ！！！」

悲鳴が聞こえた、俺は急いでその場に向かう

「なんだ!？」

俺は悲鳴の場所につき眼を見張った

そこには、女の子、手には人形

目の前の家から出たと思われる。

「もしかして、人形をとりに・・・」

<んな事どうでもいいよ！ヤバイッテ！！>

俺のもう一人も流石に人の心はあるらしく焦る。

「でも！追いつけねえ・・・!!！」

距離は少なくとも50mはある
いくらゴッドイーターでも目の前に襲われる寸前の女の子を助ける
には・・・

「黒猫!!」

<了解!!体借りるよ!!>

俺は自然と、そいつを黒猫と呼んでいた。

身のこなし方といい、猫っぽいから、そう呼んだのかもしれない
俺の体が一瞬軽くなる、そう思ったなら
俺が、声帯を振るわせた

「それじゃ、いくぜえ!!」

黒猫は一気に駆け出した、俺自身の体を
俺以上にフルに使いこなしていた、ゴッドイーターなので
体の運動能力は底上げされているが
それを上手く引き出せない俺とは違い、全力を出している

「とりあえず約束したからね!僕が体を使う代わりに・・・」
黒猫は一気にジャンプし・・・

「人間を助けるってな!!」

思いつきりシユウを蹴飛ばす

「ギャアアアアオオオオオオ!!」

シユウが俺に牙をむく

黒猫が神機を取り出す

「さあ、来いよ、化け物が」

そいつって神機片手に駆け出す

「はあああああ!!!!」

大きく振るったそれは、いとも簡単にシユウの翼の一枚を砕く
「もういつちよだぜえ!!!!」

同時に左腕でもう片方の翼をもぎ取る
俺の体に痛みが走る、こいつ・・・また神機を使わずに捕食しやが
ったな・・・

神機を使わずとも今の俺はアラガミを捕食できるようになっていた
だが、それと同時に体に痛みが走るようになっていた

これだから神機を使えと何べんも行っているのに・・・

そう思いながら黒猫に体を預ける

「ひやはははははは！！まだまだあ！！！」

神機を掲げた黒猫は、チャージし刃を強化する

「お前、俺に喰われてみなよ」

そういつて神機を振り下ろした・・・

シユウのコアを入手し、周りに他のアラガミがないかを
確認する、そして、いないことがわかると

「お嬢ちゃん、大丈夫かい？」

そういつて手を差し伸べる、女の子は
頭を縦に振り、その手を取る

「それじゃ、かえろっか」

そういつて手を引き、居住区まで送った黒猫

お前、何でこんなこと

「なんでだろうなあ」

っは、なんだそりゃ

「お前がいったじゃねえか」

あ？

「俺は黒猫、気まぐれが激しいんだよ」

緊急任務

「まったく、ここんとこアラガミが出てないな」

「そうだねえ」

俺とロキは自室でくつろいでいた

ちなみに先が俺、次がロキ

「で？コードネーム黒猫さんは何がしたいんだ？」

「なにも、コードネームっていうかニツクネームロキさんは？」

「同じく何にも」

ここんとこアラガミは現れても小型のオウガテイルかコクーンメイデンなどで

これといって歯ごたえを感じなかった

セカンドチームともあのグアドリガの一件以来みないし

どこかでミッションをしているんだろうが

今日は日曜日、日曜日で何も無いと思ったら・・・

「「寝るしかないだろ」」

俺とロキは声を八モらせ布団にもぐる

そして、丁度眠ろうかといったその瞬間に、二人のケータイがなった
任務だった・・・

「「ええ〜……」」

俺達はがっくりしながら互いのケータイを見る

そこに記されていた内容に俺達は目を見開いた

<緊急任務：アラガミ装甲の外からやく3キロ先に任務に行った

チームの一人がアラガミ化、仲間の3人を殺し依然逃亡中

早急にこれを抹消せよ、尚、このゴッドイーターはまだ完全にア

ラガミ化はしておらず

本人の神機を使わなくても駆除可能>

「アラガミ化・・・」

俺はわなわな震える右手を抑えながら呟いた

「でも、これって人を襲うかもしれないんじゃない・・・」

ロキも震えている

「急ごう!!」

俺達は私服のまま、アラガミ装甲を抜け

目的地に向かう、そして、その周辺と思われるところについた
そこで眼にしたのは・・・

「う・・・これって・・・」

ひどいにおいで鼻をふさぐ俺

「人間・・・かよ・・・」

同じくロキ。

そこには首から上がない男と、胸の中心を何かに切り裂かれ、食い
ちぎられた

俺達より少し年上と思われる女性、最後に神機を握り締めたまま
体が真っ二つになってしまった、少年。

そのあたり一面真っ赤に染まっていた、この人たちの血だ。

「こんなのって・・・」

「ヒデエ有様だな」

俺達はそういいながら神機を発動させる

そして、背中合わせに周りを警戒する、と、そこで黒猫が

<右、距離は300m先、人間とアラガミの両方を感じるよ?>

「ロキ、右側300mだ」

「了解」

そういつて神機を銃形態にする

俺はさつと、足音を立てずに近寄る

200メートルくらいすすんで、ようやく目標が見えた。

目標は右腕の腕輪と神機が一つになって人体を侵食し始めている。

その眼に白目はなく、真っ黒に染まっている。

口からは牙が生え、人間味を失いかけていた。

「つく・・・いくらアラガミとはいえ・・・」

こんな人間を殺すようなものじゃないか・・・

そんなとき、黒猫がまたささやいた

<僕が殺そうか?>

「なに?」

<僕があいつを殺そうかつて>

「冗談じゃない、なんでお前にやらせなきゃならないんだ」

<君が殺せないなら僕が殺す>

「ダメだ、あれは俺がやる・・・」

<ごちゃごちゃウルせえな、お前じゃ殺せねえ、俺がやるっていつてんだよ!>

「黙れ!お前は俺の中にいる!」

そういつて駆け出す、それと同時に後ろから

援護射撃が来る、まったく、いいパートナーを持ったよ。

目標はこちらに気づいた

「あああああああああああああ!」

叫びながらこつちに飛び込んでくる

あいつの武器はブレード・・・旧型ゴッドイーターだったのか・・・
それはもはや右腕と成り果てている

「ごめんよ、君は俺が!!」

そういつて神機、イーブルワンを振り上げる

「喰らえ!!」

一気に振り下ろす

それを目標はひらりと避けて距離をとる

そして、その距離を5秒もせず詰り寄る

「つちい!!」

俺はシールドを展開、攻撃を受け止める

「ダメだなあ・・・俺」

俺は攻撃を受け流しながら呟く

「こんなんだから黒猫に潰れ込まれるんだよ・・・」

そういつて距離をとる、チャージの体勢に入るためだ

「だからさあ・・・お前は俺がこの手で・・・」

チャージを行い刃を大きくし

「終わらせてやるよ!!」

それを振り下ろす・・・

緊急任務（後書き）

はい！久々に更新でふ
はい、最近また悩み始めたお年頃ですWWW

人間かアラガミか

「喰らえ!!」

俺はチャージした刃を振り下ろした・・・
それを目標は、余裕、といった表情で
己の右腕で止めた。

神機と右腕（神機に侵食されている）が
<ガキーン!>と音を立てる。

「っな!・・・嘘だろ!?!」

俺は本気で殺すつもりだった、だからチャージも最大にしたつもり
だった。

俺が・・・無意識に手加減をしていた?

俺はそのまま振り下ろそうとするが目標はそれを交わし
さっと消えてしまった。

「・・・」

俺は呆然と立ち尽くした

俺が・・・目標を逃がした。

俺の甘さが目標に隙を与えた・・・

立ち尽くしてる俺に無線でロキが

「何やってんだ!あいつが逃げ方向!アラガミ壁がない居住区だぞ
!!!」

俺はさらに思考が停止しかけた

俺が、俺が逃がしたせいで・・・嫌だ。

俺は駆け出していた、目標を追いかけた

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌嫌嫌!!!

「俺は・・・人間を守るんだ・・・絶対に!」
そういつて駆け出す。

あいつはもうアラガミだ、何もためらうな・・・

「今度は躊躇しないでよ」

そういつて居住区手前まで来た
そこには目標がいた。

「見つけた!」

俺は神機を握り締め、目標に向かった。
だが、その足は止まった。

居住区は、血にまみれていた

そこにいたのは、一匹のアラガミ

ボルグカムラン墮天・・・荷電性をかねたそれは、町の人間を
食い荒らしていた・・・

「ああああ・・・」

目標はいきなり、わめいた

「あああああああああああ!」

そういつて、ボルグカムランに向かって走り出した

「何っ!?!」

俺とロキは眼を見張った

そこにいるのは自我を失ったはずゴッドイーター

その目標が・・・泣いてる？

泣いて、アラガミを倒そうとしている？

「ははは・・・」

俺は喉から自然に笑いがこみ上げてきた

「あははははは！！そうだよなあ！そうだよ！俺は間違っていない
！！」

そういつて俺も駆け出す、アラガミに、

俺と、ロキと、目標の共通の敵に・・・

「おらあ！！」

俺は神機を振り下ろし目標に当たる攻撃を弾く

「行けよ！せめての償いのチャンスだ！」

俺は伝わっているのかわからないが目標にそう叫んだ。

きつと伝わったのだろう、目標はこちらを見て

「ああ・・・」

そういつて神機を振り上げる

そして、もう少しで倒せると思ったそのとき。

「ふええええん、ママア・・・ぱぱあ・・・起きてよお！！」

そこにはまだ幼い10歳くらいの女の子が父親と母親と思われる
二人をゆすっていた。

<ガアアア・・・>

ボルグカムランの狙いがその女の子に変わる

尻尾の剣が彼女を貫こうと振り下ろす

「まてっ！！！！」

間に合わない！！そう思ったとき、さつと影が俺を横切った、そして・・・

<ズシャ>

目標が、女の子をかばって串刺しにされたポタ・・・ポタ・・・と、彼の血が流れる。

「お前・・・」

俺は思わず神機をすてて彼に近寄る

「なんで・・・」

彼を抱え起こして涙をこらえる

ここで泣くわけには行かない、こいつは・・・討伐目標それに感情を許すわけには・・・

だが、彼の手が俺の手に重ねられた

「・・・っ」

彼の口が動く、だが、声は聞こえないしかし、明らかに彼の口はこう動いた。

『ありがとう』と・・・

彼の手が俺の手から滑り落ちる。

俺はこらえていた涙が一気にこぼれ出た

「うわああああああああああああああああ！！！！！！」

俺は怒りの矛先を目の前の『アラガミ』に向けた

「あああああああ！！」

俺は左腕を呼び起こし、そのまま突っ込む

「俺が間違っていた！彼は間違いではなかった！！」

俺の手がボルグカムランの尻尾の剣に伸びてそれをへし折る。

「あいつは自我を失っても最後までゴッドイーターとして戦った！」

俺の左腕が奴の盾に伸びる、腕と一体になっているそれは簡単にもぎ取れた。

「それを、お前達はあああああ！！！」

最後に左腕で、自分から自分の体にアラガミを取り込む『捕食』を行なった、そして、痛みと同時に力が体に降りかかる

「お前達は、俺が、俺達があああああ！！！」

そういつて左腕を奴と同じ剣に擬態させ

「駆逐する！！！」

それを奴のコアがある口と胴体が一体になった鎧を貫く。

「それが俺達だ、それがゴツドイーターだ」

そして、最後に俺は、彼の遺体を、自らの腕で捕食した。

人間かアラガミか（後書き）

いんやあ、はやくごつどいーたー出ないかなあ？
やりたいなあやりたいなあやりたいなあー！！

楠 リツカ

「くそ・・・くそ・・・」

俺はあの目標の任務以来学校にも行かず任務も受けずただただ嘆いていた。

あんな最後って・・・あんな、人の心をもったアラガミを・・・いや、アラガミじゃない、彼は立派なゴッドイーターだ・・・彼の魂は・・・きつと報われたよ・・・

そう思いながら左腕を見る。

『彼』を捕食した左腕を。

「一緒に戦おう、君も・・・俺と・・・」

そう呟き俺はベッドから起き上がり

ゴッドイーターの制服を羽織った、丁度そのとき。

「ちよつと、やめてよ！」

と、どこからともなく声がした。

俺は部屋の外を見た、すると、鮫哀がなにやら女の子に詰め寄ってる

「いいじゃねえか、俺達と遊ぼうぜ？」

「いやだつてば！神機のメンテナンスもあるのに」

「なーら俺たちもメンテナンスしてよ」

と、クズなことを言っていた。

メンテナンスってことは調整係か？

でもあんな子いたっけ？

そう思いながら眼を赤くして鮫哀とその子の間に立つ

「んだあ？へっぽこゴッドイーターじゃねえかよ」

「じゃま、うせろ、消えろ、願わくば死ね」

俺は睨みつけるように鮫哀をみすえた

「つく・・・」

鮫哀は少しひるみ、「クソが！」と、負け犬じみた台詞をはいてどこかに消えた。

「えっと、大丈夫でした？」

俺はかばった女の子に眼をやる

頭に工業用？のゴーグルをつけていて短髪の灰色の髪タンクトップに腰辺りに上着をまいている。

「俺は神野 恭」

そういつて手を差し出す

「ああ、さっきはありがとう、私は楠 リツカ」

そういつて握手するリツカ

「きみ、すごいね、あんな人を・・・」

「普通だよ」

そういつて笑いかける、リツカも笑う

「っあ、そだ、どうせなら神機見せてよ、メンテナンスしたいな」

「あゝメンテか、とりあえず専属の技師はいるんだよね」

「ふふ、大丈夫だよ、ちょっと見るだけだから」

そういつて笑うリツカ、俺はその笑顔をみて心が休まった

こんな笑顔、久しぶりに見たな・・・
「そだね、ならお願いしようかな」

そういつて俺は神機をリツカに預けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8239u/>

GOD:EATER < 神に魅入られた少年達 >

2011年12月17日11時45分発行